「うちのねこがさあ」
一時間も黙っていたから今日はただ海をぼんやりと見るだけの時間になると思っていた。
「どこの男の子かもわからないこどもを孕んでるようなんだよね」
口調は穏やかでのんびりとしたものだったが、内容はやや重かった。
「……どこの男って……オスでしょ、言うなら」
「どちらでもそう変わらないでしょ」
「なんか、こう、……重みが違うような気がする。オスか男かで」
「……やらし」
「なんでだよ」
俺の不満を無視してアカネは話を続けた。
「で、うちのねこなんだけど」
「うん」
「食欲がすごいんだよね」
「へえ」
やっぱりそうなんだ。
「でも気付かなかったの？」
「しばらくどこかに行ってたの」
「戻ってきた時にはもう大きなお腹だった、ということ？」
そういえば小森家は昔から放し飼いだったな。
「そう。もうびっくりしちゃったよ。うれしかったけど」
「うれしかったのならよかったじゃん」
「うぅん、まあね」
「煮え切らないね」
海を見ていた顔がこちらに向く。十年以上も片想いを続けている相手の顔が。
「子ねこ生まれたらさ、何匹か貰ってくれない？」
「いいよ」
「え、ほんと？」
うちの母があまり生き物好きでないことをアカネは知っている。
「なんとかするよ」
「ありがとうっ」
肩で肩をつつかれる。今日の夕陽が緋色でよかったと思った。
「いいよ、でもあまり多くは無理だよ」
「うん、ありがとうっ」
この満面の笑みを、僕は一生見て生きたいと思っている。